

牛島定信 衣笠隆幸 林 直樹 市橋秀夫 岡野憲一郎 奥寺 崇 平島奈津子
関由賀子 岡田尊司 西園マーハ文 今井淳司 井上幸紀

序

飯森眞喜雄

近年、1980年代後半から流行りだした境界性パーソナリティ障害を主とするパーソナリティ障害が臨床家のあいだで話題にのぼることが減ってきているような気がします。一方、それと病像や症状が重なる発達障害や双極性障害の診断の急激な増加がみられるようになったのではないかと思います。

こうしたことから、たとえば以下のような疑問が浮かんできます。

- ①疫学的にパーソナリティ障害の実数が減っているのか？ それともこれまでの発達障害や双極性障害のように“身を隠して”いるだけなのか？
- ②精神科医の関心が発達障害や双極性障害に移り、単に話題にならないだけなのか？
- ③単にパーソナリティの障害としてではなく、発達障害や気分障害と関連づけて診るようになったのか？
- ④患者がそれなりに適応できる場所(多様な職業)で生きられるようになったので事例になりにくくなっているのか(事例性の問題)？
- ⑤社会の変化に伴い以前は問題となっていたような病疾構造や病態が目立たなくなっているのか(疾病性の問題)？
- ⑥治療技術や臨床の場での扱い方が向上して問題になりにくくなっているのか？
- ⑦ネットなどでパーソナリティ障害への関心が広まったことで、事例になる前に本人や周囲の人の対処に変化が起きてきたのか？
- ⑧救命救急の現場からみて自傷などの実態は変化しているのだろうか？

これらの疑問以外にも臨床家が日常臨床の場で感じておられることがいくつもあると思います。そこで、「パーソナリティ障害の現在」について自由にご意見を述べていただければ、読者にとって有用かつ刺激的なものになるだけでなく、後の時代になって現在を振り返る際の貴重な証言にもなると考えました。

本オピニオンが読者諸賢の臨床や診方のヒントや参考になれば幸甚です。

(いいもりこころの診療所)